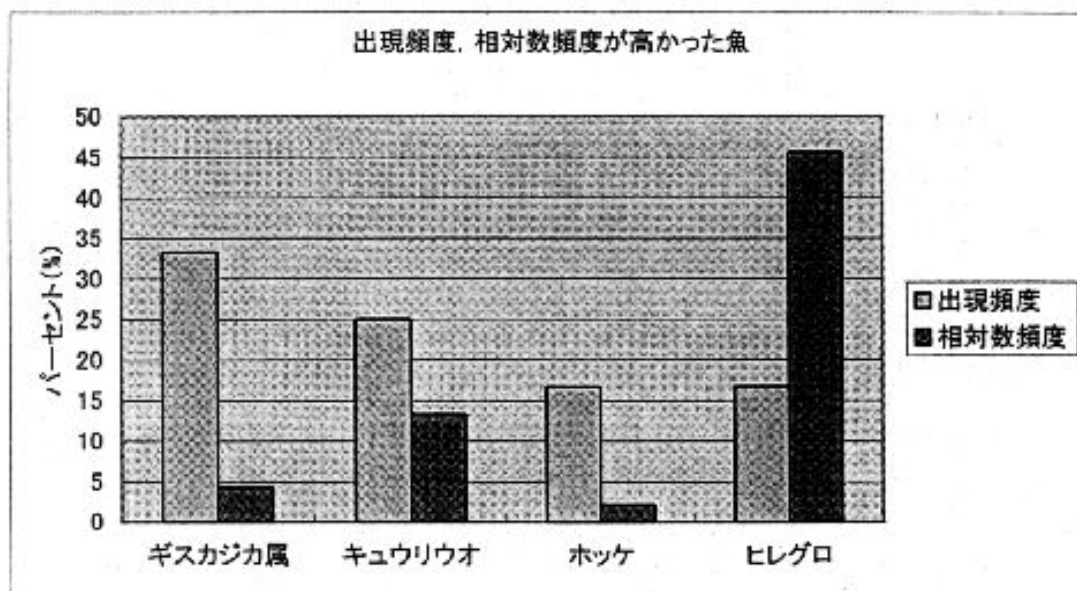


鰭脚類の食性調査法としては胃内容分析、糞・嘔吐物分析、脂肪酸組成などがあるが、糞・嘔吐物分析は非致死的方法であり、また比較的容易に多数の試料が集められるなどの利点を持つ。本研究において大黒島のゼニガタアザラシ (*Phoca vitulina stejnegeri*) の上陸場から糞を採取し、食性調査を行ったので報告する。

1999年の4 - 6月までの4回の調査で18個の糞を収集した。糞は実験室で目合1.0, 0.5mmのふるいを用いて水洗し、餌生物の硬質部分を回収した。糞の中から魚類の耳石ならびに頭足類の顎板が検出され、これらを用いて餌生物を可能な限り細かく同定した。

18個の糞のうち12個に耳石が出現した。同定された餌生物のなかから出現頻度 (F0) の高い魚種はギスカジカ属 spp, キュウリウオ, エゾアイナメ, ホッケ, ヒレグロ, 相対数頻度 (RNF) の高い魚種はヒレグロ, キュウリウオ, スナガレイであった。カジカ類は、夏期の食性でも大きな割合を占めているが、キュウリウオやカレイ類は夏期にはほとんど出現しない。キュウリウオ, カレイ類は春に産卵のために沿岸にくるので、アザラシはこの時期にはこれらの魚を摂餌していたと考えられる。これらのことからゼニガタアザラシはその時期にその場所で利用しやすい魚を利用していると考えられる。

今後の課題としては、サンプル数を増やした上で地域、季節、年度間の食性の変異を明らかにし、可能な限りアザラシ側の変異 (上陸数や頻度など) も同時に明らかにしてゆくことと、餌生物である魚類の動態に関する情報を収集すること、糞分析のかかえるバイアスとその程度を解明することなどが挙げられる。



出現頻度 = ある餌生物が出現した糞の数 / 同定可能な硬質部分 (耳石) が出現した糞の数

相対数頻度 = ある餌生物の出現数 / すべての餌生物の出現数